一橋大学大学院社会学研究科非常勤研究員
永山理穂

Gunnarsson, Lena, 2011, " A Defence of the Category 'Women'," *Feminist Theory*, 12(1): 23-37.
レナ・グナーソン，2011,「『女性』というカテゴリーの擁護」
※（）の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿の著者である Lena Gunnarson（スウェーデン・エレブルー大学講師）は、フェミニスト理論の専門家であり、近年はフェミニスト批判的実在論に関する論考を多数執筆している。本稿は、2011 年に *Feminist Theory* に掲載されたのち、フェミニスト批判的実在論の体系的成果である Van Ingen et al. eds., 2020, *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge.に再掲されている。本稿は、ポストモダン・フェミニズム以降のフェミニスト理論における、「女性」カテゴリーの忌避傾向を問題として捉え、その背景に存在する概念的混乱を整理する。筆者は、批判的実在論の立場を援用し、フェミニスト理論において「女性」カテゴリーをいかに打ち立てることができるのかについて検討する。

1. 導入（23-24）

- ポスト・モダンフェミニズム以降のフェミニスト理論において[1]、「女性」というカテゴリーは、一枚岩的な「女性」像を呼び起こし、女性間の差異を隠蔽するものとして忌避されている。
  - しかし、女性が女性であることによって、抑圧され、搾取され、差別され、排除されていることに着目する視点は、まさにフェミニスト理論の出発点であり、このような視点は、「女性」カテゴリーの擁護なしには成立し得ない。
  - そこで本稿は、「女性」カテゴリーを軽視するフェミニスト理論の背景に存在する概念的混乱を明らかにすることを通して、「女性」カテゴリーの擁護を試みたい。

- 本稿の構成は以下である。
  - まず、「女性」というカテゴリーを分析対象として使用することに反対する方法（特に交差性アプローチ）について検討し、その方法を支える理論的前提を明らかにする。（第 2 節、第 3 節）

[1] フランスの思想家や哲学者を中心に発展を遂げたポストモダン思想は、知識生産およびジェンダーに関する考察を展開し、フェミニスト方法論に大きな影響を与えた。特に Judith Butler(1990)による *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*（邦題：『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』）の登場以降、ポストモダン・フェミニズムは、フェミニスト方法論の主流となった。

- つぎに、批判的実在論という哲学的枠組みに基づき[2]、フェミニスト理論において「女性」カテゴリーがいかに成立しうるのか検討する。この試みにおいて、抽象化が重要な役割を果たす。（第 4 節、第 5 節）

2. インターセクショナル・チェンジ――女性は単なる女性ではない（25-28）

- 交差性アプローチとは、近年フェミニスト理論家の間で絶大な影響力を持つ理論的視点・方法・概念である。
  - このアプローチは、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成しあっているものとして捉える。そして、カテゴリー間で交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかを検討する。

- 交差性アプローチは、ブラック・フェミニズムに起源を持ち、第二波フェミニズムにおいて想定されていた一枚岩的な女性像（＝白人中産階級女性）を批判する形で展開した。
  - そこでは人種や階級に基づく特権を享受していない黒人女性にとって、女性であるということが、必ずしも抑圧の最も顕著な要因ではないことが強調された。
  - Nina Lykke によると、一部のインターセクショナル・フェミニストたちは、分析において「ジェンダーの優位性」を疑うことによって、ジェンダーを犠牲にして階級と人種の抑圧性を強調する傾向がある（Lykke 2007: 138）。

- 以下、「女性」カテゴリーを否定的に捉える交差性論者の見解として、Elizabeth Spelman（1997）の議論を例示する。
  - 彼女はジェンダーや人種などの「別個の単位 discrete units」（1997: 86）が存在しないことを強調し、白人女性である自分自身の「女性の部分」と「白人の部分」とを区別することは不可能であると主張する。

---

[2] 批判的実在論は、1970 年代後半にイギリスの哲学者 Roy Baskar によって提唱された方法論である。批判的実在論は、在論的実在論、すなわち、現実の大部分は、それに対する個々人の理解とは無関係に存在するという立場に立脚する。さらに、構築主義については、判断的相対主義を引き起こすとして批判し、それを克服するために、客観的実在を「超越論的分析[transcendental analysis]」によって論証するとともに、世界の実在性をオープン・システムとしてとらえ、多元的な複合的因果連関を考察する方法論を展開している（佐藤 2016: 86）。
また、批判的実在論は、存在論的実在論と認識論的相対主義（＝いかなる主張も、歴史的、地理的、社会的文脈のなかで産出されるという考え方）を組み合わせるという点において独自性を有する（Van Ingen et.al 2020: 10）。そうすることによって、必然性と偶然性の絡まりあう実在的因果連関を捉えるだけでなく、認識対象の実在性と同時に認識主観の実在性をも承認することによって、主観の有する因果的力[causal power]を積極的に認め、諸概念が人間によって実践的に構成されることを主張している（佐藤 2016: 86）。

- すなわち Spelman の議論においては、女性を女性として考えることの条件として、特定の「女性の部分」あるいは「単位」を指摘できること、つまり、具体的な存在のレベルで「女性性」を分離できることが挙げられている。

3. 女性／「女性」の構築性（28-30）

- 「女性」というカテゴリーが社会的に構築されるという前提は、ポストモダン・フェミニズム以降のフェミニスト理論の根幹をなすものである。
  - ポストモダン・フェミニズムの代表的論者である Judith Butler は、「女性」というカテゴリーを虚構的・恣意的なものとして捉える。なぜならこのカテゴリーは、「それが記述し代表しているつもりの人々（＝女性たち）の合意を得ることができるような安定した意味内容 signifer」（1999: 6）ではないからである。
  - Butler の議論において、カテゴリーは、具体的な現実の特異性を全て反映する場合にのみ有効であるとされる。

- 確かに、「女性」カテゴリーは社会的構築物かもしれないが、それでも、Anna G. Jónasdóttir が指摘するように、「女と男は、**歴史的に**、今まさに存在している人々の種類である」（1994: 220）。
  - ジェンダー化されたアイデンティティは、たとえそれが意味づけのプロセスを通じて構築されたものであるとしても、それらが生み出されるプロセスに還元することはできないし、相対的な安定性、自律性、因果性を有する。すなわち、ジェンダー・カテゴリーは、概念的な性格を持つだけでなく、世界における現実的な集団でもある。
  - このように、象徴的なジェンダーの区分が我々の認識を構造化するだけでなく、女性と男性という現実のグループ分けこそが、我々の意味体系に作用する。そのため、世界を理解し、効果的に変化させるためには、これらのカテゴリーを用いて分析する必要がある。

- では、本質主義に陥らずに「女性」カテゴリーを打ち立てるには、どうすれば良いのだろうか。
  - 以下では、批判的実在論を援用し、本質主義、均質化、エスノセントリズム（＝自民族中心主義）に陥ることなく、「女性」というカテゴリーを現実のものとして考えるための方法を提示する。

4. 具体的なものと抽象的なもの（31-32）

- 本稿では、批判的実在論者の Andrew Sayer の具体的 concrete・抽象的 abstract の議論を援用する。

- 「具体的 concrete」という語は、「一つになる grow together」ことを意味するラテン語の「concrescere」に由来する。Sayer によると、この語源は、「物体が、多様な要素や力の組み合わせによって構成されているという事実に注意を促す」(1992: 87)。
- 「抽象的 abstract」という語は、「引き離す」という意味のラテン語「abstrahere」に由来し、抽象化とは、具体的な全体 concrete whole からある側面を「引き離す」行為を指す。(1992: 87)。

- 「女性」カテゴリーを打ち立てるには、抽象化が重要となる。以下、抽象化についての考察を深めるために、第 2 節で言及した Elisabeth Spelman の議論を援用する。彼女はトマトジュースのメタファーを用いながら、「トマトからできるジュースは、単にジュースとだけ呼ばれるわけではない。それはいつもトマトジュースと呼ばれている」と述べ、女性を単に女性として語ることの不条理を強調する。
  - 彼女のロジックを批判するのは簡単である。なぜなら、私たちはトマトジュースを常に「トマトジュース」と呼んでいるわけではないからだ。時には「ジュース」、時には「飲み物」、そして時には「液体」とも呼ぶのである。また、ある人はブランド化された箱入りのトマトジュースと新鮮な手作りのトマトジュースを区別することを重視するかもしれない。
  - 以上で挙げたトマトジュースを説明する言葉はすべて、異なる抽象化のレベルで作用し、トマトジュースを異なるカテゴリーに分類している。
  - Bertell Ollman が述べるように、抽象化は「異なる倍率に設定できる顕微鏡のようなもの」(2001: 292) である。どの抽象化のレベルを選ぶかは、現実のどの側面に注意を向けたいか、ひいてはこの注意を喚起する理由によって決まる。

- Ollman が強調するように、「特定の問題を理解するためには、その問題の主要な原因となる特徴を焦点化するようなレベルにまで、抽象化することが不可欠である」(2001: 293)。
  - 例えば、ある人が差別を受けた経験を説明しようとするとき、私たちは通常、差別された人が哺乳類や天秤座であるという事実には注目せず、その人が女性であり移民であるという事実がより重要であると考えるだろう。
  - この判断は、動物学的、占星術的、ジェンダー的、人種的構造の性質に関する私たちの理論（学問的、直感的、明示的、暗黙的）に依存しており、それらは互いに比較的自律的に作用する。

- 抽象化の手法は、具体的な全体性 concrete whole が、抽象化された要素によって言い尽くされないことを前提にしている。

- 以上を踏まえると、私たちは、抽象化を用いることによって、「女性」がその人物の唯一の要素であるとか、「女性」が固定化されたカテゴリーであるなどと仮定することなく、「女性」について語ることができる。
- 批判的実在論者の Berth Danermark らによると、「抽象化は、生活の複雑さや変化を覆い隠すためではなく、まさにそれに対処するために用いられる」（2002: 42）。

- 「女性」のような抽象的な概念が、生きられた現実 lived reality とは質的に異なることを認めれば、生きられた現実と明確な形で対応することを期待することなく、この概念を効果的に使用することができる。
  - Sayer（1992）が強調するように、抽象化はそれ自体問題ではない。危険なのは、誤った抽象化（例えば、「女性は善人である」など）をすること、あるいは抽象化をあるがままに受け取らないこと（つまり、全体像を与えるかのように扱うこと）である。

- Nira Yuval-Davis（2006）は、人々の間に生じる差異は、私たちの具体的な経験とは異なるレベルに存在する自律的な社会構造（人種、ジェンダー、階級等）に基づいていると主張する。
  - 抽象化は、この種の構造を識別するために不可欠なツールである。フェミニストたちが正確に同定してきたのは、女性の生活がどれほど多様であろうとも、すべての女性の人生には何らかの非常に不利な側面が存在すること、そして、そのことが女性であることと関係しているということであった。

5. 構造、ポジション、人々（33-34）

- 女性らしさは通常、女性個人に内在する固定化された性質として捉えられるが、批判的実在論は、根本的に異なる理解を提供する。
  - 批判的実在論によれば、人々は、構造的な立場を媒介として、彼ら彼女らを構成する関係や力によってのみ存在する。
  - 女性としての立場は、その立場に立つものを、一般に女性的なものとして理解されている方法に沿う形で行動させ、男性が経験しにくいことを経験させる。
    - ◊ 女性は男性の同僚よりも収入が少なくなりがちである。なぜなら、彼女の賃金を決める人々（多くの場合男性である）は、自らの特権を保持するために女性を差別するよう動機付けられる立場にあるからだ。また、職場において女性は、自らの短期的利益を促進するために、女性らしい服装をするよう動機づけられるだろう。（Porpora 1998）。

- 人々の行動や経験は、その人の立場に内在する傾向によって事前に抑止されたり、還元されたりするものではないと、批判的実在論者は主張する。すなわち、批判的実在論に依拠しながら「女性が女性としての立場を共有している」と述べることは、「すべての女性が同一である」と主張することを意味しない。
  - その理由は二つある。第一に、人間は再帰性 reflexivity によって、自分の立場に対して一定程度の自由を持つ。
  - 第二に、交差性論者が指摘するように、具体的な個人としての女性と男性は、決して単純な女性／男性ではない。私たちは、現実のさまざまなレベルで重なり合う構造の配列の中での位置づけによってのみ存在する。このような複数の位置づけを通して、私たちはユニークで複雑な個人となる。
    - ◊ 著者が強調したい重要かつシンプルなポイントは、このような多重的な位置づけが、いかなる位置づけも存在しないことを意味するのでは決してないという点である。女性と男性は単なる女性／男性以上の存在ではあるが、それでもなお、女性と男性なのである。

- したがって、女性を女性としての地位を占める者として概念化することは、女性を固定化し、均質化し、本質化する説明とは全く異なるものである。「女性や男性が何であるかを語ることは、実は、女性や男性が行動する社会的条件について語ることである。したがって、女性と男性を概念化する試みは、必ずしも本質主義や生物学的還元主義を意味するものではない」（Jónasdóttir 1994: 220）。
  - 一方で、ジェンダー化された立場は恣意的なものではないという点に注意することが重要である。女性という立場から生まれる女性性あるいは「女性らしさ」は、本人が望むと望まざるとにかかわらず、女性の実際的な特徴であり続ける。
  - 集団的な闘争を通じて、私たちは女性としての位置づけを構成する構造そのものを変えることができるかもしれないが、この位置づけを考慮できるカテゴリーがなければ、そうした闘争は不可能であろう。集合的なカテゴリーとしての「女性」の実在性を軽視する構築主義の問題は、女性の生と構造的なジェンダー的地位との間に存在する物質的な関係についての概念化を排除してしまうことである。
  - このような問題を解消するために、批判的実在論は以下のような立場をとる。すなわち、集団に属する人々が、物質的に（そして言説的に）構成されたジェンダー構造における共通の地位に本質的に結びついていることを踏まえ、女性の集団を個々の女性と同じように物質的な存在として扱う。

6. 結論（34）

- 多くのインターセクショナル・フェミニストが指摘しているように、ある特定の人物の生を理解することは、その人を構成する様々な立場の「内容 contents」を「追加 adding」するという機械的な問題ではない。

一橋大学大学院社会学研究科非常勤研究員
永山理穂

- 理論化とは、具体と抽象、主観と客観、特殊と一般との間の弁証法において行われる厄介で決して明瞭ではないプロジェクトである。言い換えれば、常に可変的である具体的現実と、それを理解し説明するために用いられる救い難いほど定常的な言葉や記号との間で、理論化は行われる。

- ジェンダーは、ローカルな差異を踏まえて研究・理論化される必要があるが、それでもなお、世界レベルで女性を一つの集団として考えることは可能である。なぜなら、ジェンダー構造は場所によって異なって見えるが、一つの（分化した）全体として考えるに値するほど、内部的な一貫性を持っているからである。
  - Jónasdóttir が言うように、女性の共通性は非常に「薄い」ものと考えなければならず、その共通性は、経験的なレベルに移行することはできない。しかし、この薄い共通性は、「経験の共通基盤、したがって闘争の共通基盤」（1994: 41）を内包している。
  - フェミニストの分析カテゴリーとして「女性」を放棄することが致命的である理由は、このカテゴリーが、女性たちのジェンダー構造に対する特定の関係を示すために必要だからである。
  - 私たちは確かに、男であること、女であることが何を意味するかについて、決定論的で本質主義的な観念を脱構築し続けるべきである。しかし、ジェンダー化されたカテゴリーそのものの存在を否定することは、フェミニストの理論を完全に網羅するものでは決してあり得ない。

【参考文献】

佐藤春吉，2016,「産業社会論集『批判的実在論特集』編纂にあたって」『産業社会論集』立命館大学産業社会学部，51(4): 83-91.